

## ◇イタリア「第二のルネッサンス」の現場訪問記①

## 生活の豊かさとはなにか

——日本でどう実現するか

●ルポライター 今崎 暁巳

## 国栄えて民貧し？

——あなたの生活実感は……

## ◇なぜイタリアを学ぶのか

私は、この三年間続けて、毎年二、三週間イタリアを訪ね、北・中部を中心にいくつかの都市で、庶民の暮らしに継続的にふれる機会に恵まれた。

二年間は、大へん意欲的にイタリアでの生活協同、地域協同の現状に学ぼうと調査団を組織した大阪よどがわ市民生協の人々、二宮厚美大阪外大助教など学者グループ、自治体職員研究会グループの方々といっ

しよだったし、昨秋は日本生活協同組合連合会の代表、かながわ生協など、関東・九州の地域生協リーダーの方々といっしよだったということ、ごく自然にポローニャ、フィレンツェなどの各地区行政の実情、協同組合、「人民の家」の日常、そして平均的市民の家庭生活まで訪ねることも実現した。

なぜ今、イタリアなのかということだが、つめて言うならば、GNP第二位となり、国としては豊かになったといわれる日本の、これから市民一人ひとりの暮らしを豊かにするために、何をどうしたらいいかを見つけたことが目的だといえるように思う。その視点の必然性は、個人に限らず、ここ二、三年、前述の

生協・自治体・学者諸先生をはじめ、商工業者、文化団体、労働組合、医療関係などなど実に多様多彩な団体・個人が、要約すれば、人間の暮らしの新しいありようを求めて、イタリア視察に取り組みはじめた事実が、なによりも雄弁に物語っている。

つまり、単刀直入に申せば、GNPは日本より低いイタリアの暮らしに、多くの日本人がよりよき暮らしづくりをするうえで、ぜひふれて知る必要がある事実・状況が存在しているということ。ということは、日本は高度経済成長の結果、GNP第二位の経済大国になったけれど、国民一人ひとりの暮らしには豊かさの実感が乏しく、自由・人権・民主主義の本来、西ヨーロッパの生活をき

ちんと見せてもらい、自らの到達点課題を見つけたそうということである。明治維新には、ヨーロッパの生産・技術、ブルジョア政治制度を学びに行ったけれど、今、二一世紀の暮らし方を創り出すうえで、かつては不十分にしかとりいれなかったヨーロッパの人間中心の福祉、文化、教育のありようを学びに行くようになったといっているのではないか。

大多数の日本人の暮らしが、実質はそれほど豊かでも人間らしくもない事実の指摘は、まず、八〇年代に入ってからフランス、ドイツからの声として、ウサギ小屋に住む働きすぎ人間。とか。コンピューターを使う猿。といった衝動的表現で伝わってきた。その後から、高度経済成長神話が完全に崩れ、中流意識。が勤労市民の日常から次第に薄くなっていった。その裏付けとして、深夜までの残業、二時間をこえる通勤時間、テレビと耐ハイしかなない文化など、ゆとりのない暮らしの実体が誰も意識にのぼるようになった。

そして、昨年のNHK教育の住宅事情をとりあげた番組では、核家族前提の日本の団地住宅は、三世代同居を前提とする、発展途上国スリランカの団地よりずっと狭いと説明さ

れたし、日本生命の行なった大企業  
社員の意識調査では、ついに六〇%  
以上が東京の大企業サラリーマンの住  
宅環境は貧しい、と表現するにいた  
ったのだ。

◇—豊かさの三つの指標

●ロザンナの目

私がイタリアで見聞きしてきた紛  
れもないイタリア人の豊かな暮らし  
ぶりを、どんなふうにしたら真実  
として受けとってもらえるかを思索  
している時に、思わぬ助け舟がNH  
Kのブラウン管を通して、いきなり

全国のテレビ視聴者に直接届けられ  
た。なにしろマスコミ、あるいは学  
者、経営者、政治家、労働組合指導  
者を問わず、イタリアといえれば近代  
化に遅れをとり、生産性は低く、ス  
トばかりしており、男は女たらしで、  
観光客の財布を盗み、マフィアが支  
配する、危険で不安な国というのが  
日本での定説になってきているから、  
そんな国の暮らしがアメリカと肩を  
ならべてモノをたくさんつくる日本  
の国民の暮らしより豊かだなどと表  
現するには、大変な努力が必要だと  
いうのが、掛け値のない日本情報社  
会の現実なのだから。



フィレンツェ「人民の家」、サッカークラブの  
子どもたちと

日本における高度経済成長の成果  
の表現を、国民総生産世界第二位と  
いう事実以外は大幅に修正しなければ  
ならないという、カルチャーシ  
ョック。というべき事実の報道が、  
六一年四月、NHKの磯村尚徳の  
「世界の中の日本」シリーズ、日本  
はどこへいく。によってなされた。  
この日の、日本が目指す。豊かな暮  
らし。のテーマは。時間の豊かさ。  
であり、まず、日本の目指す道は、  
世界諸国の歩みのなかで、移民受け  
入れの。アメリカの道。か、ハイテ  
ク農業なしの。香港の道。か、とい  
う二つの方向を検討したうえで、三  
つ目の時間を豊かに使う。イタリア  
の道。を参考にし、学ぶべき暮らし  
方として、実例をあげて検討するの  
が特別番組の方向だった。

豊かさ。をめぐるさまざまな登  
場者の発言が非常に面白かった。結  
論部分の二人の主張のなかで、ソニ  
ーの盛田社長一人が、これまでの大  
企業の生産拡大一辺倒のいき方を肯  
定し、あとの二人、大阪大学の山崎  
正和氏と長洲神奈川県知事は、世界  
の流れである。時間の豊かさ。を第  
一にする生活づくりの方向に行くべ  
きだと意見が分かれたのも興味深か  
った。なんといっても、生活の場か  
らの証人として登場した、イタリア  
に生まれ、日本人歌手ヒデの妻とな  
ったロザンナの証言が圧巻であった。  
ロザンナは、ごく淡々とイタリア  
と日本の暮らしの比較を彼女の言葉  
で語った。彼女独特の面白い日本語  
表現で、生活の豊かさ貧しさについ  
てふれたが、その内容は、この日の  
テーマ。時間の豊かさ。を軸に高度  
成長万能、日本型豊かさ観を疑わず  
にきた人たちには、衝撃の証言であ  
った。  
「日本は国が豊かで、イタリアは  
国が可哀そう（財政赤字のこと）と  
いうことですけど、国民の暮らしは  
イタリアの方がずっと豊かです。」  
そう断言したうえで、ロザンナは、そ  
の根拠として、三つのことを語っ  
た。時間の豊かさ。については、  
ウィークデーの午後一時四十分にな  
ると、六時間労働を終えて退庁する  
領事員のことや、夜は働かず豊かに  
楽しむことや、夏は一カ月のパカン  
スが常識であることや、日本の現実  
とはあまりにも異なる様子が次々と  
映像で示された。  
二つ目は、住宅の広さについて、  
女性らしく、「約三倍です」といい  
きったし、三つ目は、病気になる  
ても医療制度がよくて、お金がかから

ないことをあげ、最後に、結論として次のようにしめくくった。「ですから、イタリアではお金が残ります」。

彼女の語ったのは、生活の中身だから、誰にでも理解できることだけれど、一つひとつをつないでイタリアの平均的市民の暮らしの日常をえがいてみると、私たち平均的日本人にとってうらやましく、まるで別世界の話のような生活サイクルが浮かびあがってくる。それは同時に、日本人の暮らしの中流化。など、今になれば経営者たちの世論操作のデマゴギーだったといわれても仕方ないほど、ヨーロッパ・アメリカの市民生活のレベルからほど遠い実態があることを認めざるをえない。大企業社員がスリランカより狭い団地住宅に住み、夜中まで働きつづけ、なお東京近郊で一生働いても家をもてない、この偽りのない東京の現実。

### ●物質的貧しさに陥る原因

時間の豊かさ。ゆとり・楽しさ。に欠けるだけでなく、勤労者一人ひとりの物質的経済的ゆとりも、物価・社会保障との関係でみる時、東京では停年まで働き、利子を含め七〇〇万円をこえるマンションのローンを払うのが人生の目的になっ

てしまう事実をあげるだけで、私たちの暮らしの貧しさを指摘せざるをえない。GNP二位の国の市民が、発展途上国からも批判される

。貧しい。市民生活をおくっているこの現実。私たちの物質的貧しさに陥る根拠として、ロザンナのあげた三つ以外に、私は二つの理由をつけ加えたい。つまり、世界に例をみない教育の産業化にともなう小学生の塾費用に始まり、大学のための予備校に七〇万円、八〇万円支払う仕組み、さらに、一年で土地が三倍に値上がりしてしまう土地高騰の仕組みである。この二つをあげれば、私たちがいかに住んで、食べて、通勤して、働いて、楽しく日々を暮らすという人間の基本的な暮らしを、お金をかけず安心してやれる世の中の仕組みに恵まれていないかという決定的な事実を思い知らざるをえない。

この稿を書いているとき、NHKの土地高騰テーマのスタジオ番組から、三菱総研の平本室長が、いい大学、いい企業に入って働けばよくなるというサラリーマンの生活は幻想になったと語り、社会保障研究所の大本女史は、主婦一人ひとりが暮らしのよくなる社会をつくろうと呼びかける声が聞こえてきた。

### ◇—ズレはどこからきたのか

人間が豊かに幸せに暮らすことについての認識あるいは状況に、どこでどういうふうなズレが生じてしまったのだろうか？ 明治維新以来一〇〇年、日本近代化の思想・技術・組織・文化づくりすべてについてのルートである西ヨーロッパの市民の暮らしとの間に、どうしてこうも深さだろうか？

歴史学者のいう、維新のイデオログ福沢諭吉によるフランス革命の三つのテーマのうち、自由。平等。はとりいれたけれど、三つ目の人民主権の柱というべき。連帯。を用心深く取り除き、自由民権運動の徹底的弾圧を完成させたところから、日本民主主義の長い受難の時代が始まったという歴史認識が、まず必要だと考える。つまり、ズレはこの一二〇

年の間に、上からつくられた日本独自の政治・生活意識のせいであって、日本とヨーロッパの相容れない溝でもなんでもないという事実。むしろ、ロザンナ発言に見られるように、現代の若者や子育て中の女性たちの生活感覚は、言葉や習慣の違いをこえ

て、ヨーロッパの市民感覚に共通する要素の方がはるかに多くなっているように思う。

問題は、ヨーロッパがフランス革命、産業革命、もう一つさかのぼりルネッサンス以来、絶えることなくデリケートに追い求め、今、その第二の花開く時を迎えようとしている人間の民主主義的。連帯。協同。の現状と暮らしのありようを、きちんと見ようとし、伝えようとする政治家をはじめオピニオンリーダーのありようが、大きいように思う。たとえば、労働組合が賃金闘争のスローガンにした。ヨーロッパなみの賃金を。という提起は、政府・経営者がGNPの数字であたかも市民生活そのものが豊かになったかのような錯覚をつくったのと同じ結果を、労働者の意識につくりだした。

労働時間、社会保障、住宅環境、文化状況との関係で、総合的に暮らしの中身を豊かにする観点をぬきにし、深夜までの時間外分をふくめた賃金の額面でヨーロッパ水準を抜いたといい、ヨーロッパの労働者市民より日本のサラリーマンの暮らしが豊かになったという間違った事実認識をまき散らす片棒をかついでしまったのだ。

気がついて、現在の暮らしをそのまま見つめれば、日本人・イタリア人主婦、ヒデ・ロザンナの生活実感のなかに、すべては写し出されているということ。

マスコミと企業情報を信じてきた日本人にとっては、青天の霹靂というべき、日本人より豊かに暮らしているイタリア市民の日常を、まず見ることにしよう。とりわけ、NHKのとりあげた、時間を豊かに使う、暮らしの現実から始めよう。

## 時間にゆとりをもって暮らす実情レポート

### ◇——通勤二〇分、昼食三時間の生活

時間を豊かに使って暮らす実情を話すのであれば、まず、ローマであれミラノであれ、イタリアを訪ねた人なら誰でもすぐ経験することであるが、商店や事務所の昼休み時間が大変長くて面喰うことがある。

いくらか長い短いはあるにしても、前述した公務員とか教師のように、早朝から一気に六時間働いてしまっただけでさえない仕事は、ほとんど休みもとらないで二時近くまで働く

けれど、商店のように夕方営業する必要がある業種などは、昼はたいいてい、一時から四時までたっぷり休むことになるのだ。したがって、レストラン、カフェなど飲食関係の店で買い物をすると思うと、一時をまわるとシャッターがおりて、四時まではなんとしてもショッピングができないことになってしまふ。

「働く人間の休み時間が権利として確立されてきたということと同時に、イタリア各地の食習慣が、一家の団欒をふくめて昼食にたっぷり時間をかける生活を大切に行っていること、両方の要素があるでしょうね。一部に、ファーストフードなど、アメリカ式食文化が入ってきて、忙しく合理的に簡単という傾向が生まれてきている大都市もありますけどね……」

北部の観光都市ベネチアで、売りこみ上手にベネチアガラスの魅力を語った日本語の巧みなガイド青年も、イタリアの誰もが大切にしている生活習慣のことになると、実にフェアに、厳しいとさえいえる口調で、昼休みを三時間とするイタリア式生活の楽しみを口にした。商店でなく、勤め人の場合も、通勤時間二〇分、遠くても三〇分だから、昼休みに帰っ

て一時間かけて食事をし、一時間ベツトインして四時にもう一度職場に戻るゆとりがもてるのだ。

「え?! 片道二時間かけて東京に通勤するサラリーマンが結構いる? それじゃ、まるでスイスから毎日出張ぎに来るようなもの」

私が、千葉の大網の先や、茨城の土浦の先から出勤してくる東京のサラリーマンの話をする、ガイド青年は信じられないという表情で首をふってつけ加えた。

「イタリアの労働者は三人に一人が別荘をもって、平均一時間くらい海や山に、家族で週末・日や夏のバカンスを過ごせる三LDKをもっていきます。通勤三〇分以内、セカンドハウス一時間というのが、勤労者の常識になっています」。

### ◇——週に二回しか芝居が観れない?

時間の使い方のわくから踏みこんで、フィレンツェの団魂の世代、二人の子持ちの夫婦の時間の過ごし方について語ろう。

#### ●文化協同組合の運動について

一年目に、大阪代表団の男女一〇人を、ポケットマネーで素敵なステ

ージに招待してくれたイタリアの協同組合連合会レガの職員、カバリニさんと出会った一日のこと。

その日、私たちはフィレンツェにあるトスカーナ州のレガ本部を訪ね、幹部の方たちから、イタリアで住民自治による新しい町づくりが進んでいる中北部諸州、とりわけ生活水準も高く、生活協同活動が文化、子育て、生産、と多様なひろがりを見せているフィレンツェ市周辺の様子をきいた。

「中心は、市民の暮らしの質を自らの運動で変えていくことです。政党も行政も協同組合も労働組合も商業者も、合意しながら、一つひとつやっています。たとえば、消費生活協会は洗剤による環境汚染をやめる運動で、一七万人から二五万人へと組合員を一年で増やしましたし、また住宅建設では、先生たちとか退職者とかがそれぞれの住宅団地をつくり、新しいゆとりある町づくりの力になっていきます。また、農業でも、ワインとか家畜とかそれぞれの生産で協同組合をつくり、消費生活と提携することが進みましたし、小売業者やサービス部門の仕事も、すべて行政と協同組合が関係する団体と協力・協同しながら、新しい仕事づくり、



フィレンツェで観劇後、ガバリニ夫妻と

町づくりにつとめています」

私たちは、日本でも今模索しつつあるさまざまな生活協同の可能性の視点で話をきき、とりわけ、耳新しい、文化協同の中身に興味をもった。

「文化の分野で、住民が協同組合と市行政の機能をつないで、一部の知識人だけでない市民中心の文化をつくっていかうという運動。一九七〇年代に入って、アメリカやコマールシヤリズムの影響をうけた文化が人間生活をダメにすることに気づいたところから、私たち市民の文化を創ろうという行動になって広がってきた。

たわけです」

### ●イタリアの市民生活の常識。

文化協同組合会長の魅力ある報告をきいた後、私は、自ら共稼ぎ、子育て最中のインフォォメーション担当のロベルト・カバリニさんと、つつこんで話しあうことに熱中した。通訳の方を、私が独占するわけにいかないの、片言の英語で、家庭の構成やテレビ映像事情などについて質問をはじめたのだが、彼も似たようなかえって幸いし、夢中になって一時間あまり語りつづけることができた。

ということなのである。

●イタリアの子どもたちの暮らし  
それにしても、この夜、招待していただいたステージのなんと楽しかったことか。

一七〇〇年代からあるという、四〇〇人ほど収容できる円形椽敷席の小劇場。ヨーロッパで名高いフランスのボードビリアンと組んだチャップリンの娘、ピクトリアの素晴らしきイシヨーステージ。休憩をはさみ、ほとんど二時間一杯に、楽しさあり、驚きあり、おかしさあり、人生の歓びあり、ある時は綱やブランコの曲芸、ある時はファンタステイックな踊り、そして歌。ある時は短い言葉を生かす劇と、心ゆくまで満喫できた変幻自在の珠玉の芸の魅力。

言葉の障壁をこえて、われわれ日本の男女を楽しませてくれるとともに、椽敷席のあちこちで身体を乗りだし、眼を輝かす子どもたちの熱気が満ちていた。

カーテンコールにこたえるピクトリアに拍手をしながら時計をみると、もう一〇時半をまわっていた。ウィークデーの夜一時近く、イタリアの小・中学生は、ヨーロッパの伝統が脈うつ名優のステージに出あ

い、人生最初の芸の感動に胸を震わせる。この素晴らしい生の芸術が子どもたちを感動させ、創造の歓びを初体験させる大いなる力をあらためて確認している耳元に、隣の女性のつぶやきが聞こえてきた。大阪の生協の理事さんである女性が、子どもたちの光景をみて言ったのだ。

「あら、いいのかしら、子どもたち……」

突嗟には彼女がなにをいいたいのかわからなかったが、聞いてみて、子どもたちがこんなに大勢、こんな時間に劇場で芝居をみていいのかしら、と聞いたことがわかった。

「そうか……。そういえば、日本の中学生はこの時間に劇場にいれば、非行か落ちこぼれと、親たちも考えてしまうことだものね」

話しながら、二人とも日本の親の世代として、いかにイタリアの大人、子どもたちの日常の暮らし方と違ってしまっているかに気づいた。彼女のように、添加物のない食物づくりをと自覚的に生活づくりの活動をしている女性であっても、子どもは学校が終われば、部活か塾かファミコンか、そして夜は、机の前でお勉強という、日本型子育て教育の常識に縛られ、それ以外の子どももの自由な

人生との出会いや選択など考えられなくなってしまうている、心貧しい日本の現実。

### ●「大人社会」の責任

私は、イタリアに発つ前、夜一時すぎ、池袋の喫茶店でみた塾帰りの母子の姿を思い出していた。

「さあ、もう一問よ、頑張つてね」

母親は、進学塾のテストで間違えた問題の復習を、帰りの喫茶店で子どもにやらせていたのである。あの時の、眼鏡の奥に沈んでいた日本の息子の眼の光と、ビクトリヤの至芸に涙を浮かべるイタリアの息子たちの眼の輝きが、なんとちがわずに

ていることか。子どものせいではない。大人のせいなのだ。親だけではない、教師だけではない、日本型高度経済成長社会をつくってきた大人社会

全体が、こんな時間にこんなにも貧しすぎる時間の使い方をしてしまう母と子をつくってしまったといううしかなない。こうして書いている瞬間にも、私や磯村尚徳氏だけでなく、日本最大のコンツェルン三菱の研究所長が、「もう、いい大学、いい企業に入つて、黙って働けば将来地位が約束されるというのは幻想なのだ、人々が知るべき」と発言するの

を耳にすれば、なおさらのこと。今なお、子どもに人と人の出あいの歓びを体験させることをしていない親は、まず子どもとともに、豊かな自然を歩く体験をすることである。ともに涙を流し、笑いあえるいいイメージを体験することである。日本とイタリアの違いなどと理屈をこねて、なにもしないのも大人。人と出会って美味しいものを食べて、楽しい音楽、遊びができて、イヤだということどもはイタリアにも日本にもない。子どもたちはいつだってステキな出会いと感動を心待ちにしている。

◇——下駄ばきでいける地域のたまり場——「人民の家」

### ●人との出会いを大切にす文化

「時間を豊かに使うということ、人と人が一層豊かに楽しく出会い、暮らすということでしょう。芝居を観るとか、サッカーをするといえは、それが人と人との出会いであることはわかりますが、一人で読書することも、本の世界で自由に考え、空想し、抽象の世界で多くの人々と出会い、ドラマを体験し、今までよりもっと豊かな現実の人間世界に戻っていくことでしょう……」

つ気づいたことは、豊かに人と人が出会うこと、人生に希望をイタリアでもつこと、そこに時間を豊かに使う。文化。の特徴をみているということ。

「だから、テレビづけが発達を害するだけでなく、ドラマをダイジェストしてすませるのもよくない。演劇、音楽、オペラ、映画、できる限り生の、人間の創り出す大きな感動にふれ、人生の美しさ、楽しさを肌身で感じられるようにしなければ……」

その点で、とりわけ日本のテレビドラマが、戦争、事件ものが多く、あるいは耐える根性ドラマ、オカルトものと、とにかく人生に夢や希望をもち、生活が楽しくなるような作品が乏しいことを痛烈にいわれた。イタリアの物語もドラマも絵もポスターも、子どものための作品は、デザインもみごとで、カラーは美しく、ストーリーも夢や楽しさに満ちたものが溢れている。それは、現実の生活が大人社会の協同で、子どもにも希望がもてる日常が次第に広がっていることと関係しているのだ。

その意味で、北中部の都市中心に地域の大人たちが、毎日日本音で楽しく人と出会い暮らす場所に変身しつつある、下駄ばきでいける、人民の

家。(カーサ・デル・ポポロ)のこ  
とを語ろう。

●自己実現の場

今まで日本で紹介されていた。人  
民の家。は、ヒットラー、ムッソリ  
ーニのファシズムに殺されること  
をノーと考えた、さまざま考えの  
大人、キリスト教民主黨員も社会主  
義者も、神を信じる者も信じない  
ものも、ともに討論し語りあえる  
場所として生まれ、北中部中心に広  
がってきたけれど、ここ数年、急速  
に大人が討論し協同する場所から、  
老若男女、子どもを含めた地域住民  
の毎日のふれあい、楽しみの場所と  
して、大きく変身しつつあるといっ  
ていいように思う。

日本のいま流に言えば、すべての  
住民の、自己実現。パフォーマン  
ス。の場所になる。そんな場所が、  
たとえば五〇万足らずの中都市、ポ  
ローニヤやフィレンツェに、八〇か  
ら九〇カ所存在することになるのだ。  
つまり、人口六〇〇〇〇人か七〇〇〇  
人くらいの地域に、必ずそこに住む  
住民自身がつくり、管理し、運営す  
るセンターがあるということ。日本  
流に言えば、小学校よりもさらに狭  
い、本当に下駄ばきでいける保育園

単位の地域に毎日毎晩行って、お金  
をかけないで楽しんだり、スポーツ  
とか芝居とか遺跡発掘とか、それぞ  
れが興味をもっていることをグルー  
プでできる空間が、そこにあるとい  
うこと。

説明すればこういうことになるけ  
れど、こんな空間が身近に、自分た  
ちの力でもてるようになった時、一  
人ひとりの住民の日常にどんな変化  
がくるものなのかを伝えるのは大変  
なことである。すなわち、こんなに  
キメ細かく、市民一人ひとりが自分  
の文化とパフォーマンスをもてる生  
活は、おそらく地球上、今やっとイ  
タリア中北部で始まったばかりとい  
ってよく、住民一人ひとりの文化の  
時代、第二のルネッサンス。と、  
イタリア自身も磯村さんも私も名づ  
ける生活変革の日常がそこにあるの  
だから。

私は毎年訪れるたびに、いくつか  
のカーサ・デル・ポポロで人びとに  
会い、今、一年一年、イタリア市民  
の暮らしが変わりつつある様子をき  
くことを心がけた。三年通って私に  
もわかってきたことは、当事者自身、  
自分たちの参加で眼に見えて変わっ  
ていく町の暮らしが、どこまで人間  
味豊かなものになるか、今は夢と希

望を一つひとつ現実のものにしてい  
る時だとしか言えない。

ある四〇歳の、運営委員をしてい  
るフィレンツェの葬儀屋さんが言っ  
た。

「昼間仕事をして、夜ここに来  
て、みんなに会って、音楽を聞い  
て、ワインをのんで……この町に生  
まれて、働いて、このカーサをつく  
って……生きるって、すばらしいと  
思います」

葬儀屋さんに生きる歓びを聞かさ  
れたのは、私の人生、初めてのこと  
だった。

労旬新書 組合員必携

内山光雄著	労働運動入門	450円
中林賢二郎著	労働組合入門	450円
戸木田嘉久著	合理化問題入門	350円
角瀬保雄著	経営分析入門	500円
高木督夫著	新版・賃金入門	500円
黒川俊雄著	新版・最低賃金制入門	400円
小島健司著	賃金問題入門	450円
青木宗也著	労働基準法入門	500円
窪田隼人著	就業規則入門	450円
片岡昇著	労働協約入門	400円
中山和久著	公務員法入門	450円
中山和久著	労法入門	450円
吉田秀夫著	社会保障入門	450円